

平成 27 年度第 2 回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 27 年度第 2 回文系チャレンジ講座が、平成 27 年 7 月 15 日、「映画で入門！経済学」をテーマに、本学経済学部佐藤 隆先生によって行われました。

遠隔配信された大分^{おぎのだい}雄城台高校・大分鶴崎・大分商業・日田・^{あじむ}安心院・別府青山 別府翔青・大分西・三重総合の 8 校(230 名)と、来学受講の玖珠美山(22 名)の各高校から計 252 名の高校生が受講しました。

はじめに佐藤先生は「この講義では、映画という身近な素材を使って、経済の問題と経済学の考え方について学びます。これから、①実際に映画の一場面を観て、②その場面に映し出された経済の問題を理解し、③その問題を解決するにはどうしたらよいか、について“経済学”を用いて皆さんと考えていきます。この授業は映画を使った経済学の入門講義ですが、経済学をマスターすれば普通の人と違った観点から映画が楽しめることを伝える講義でもあります。それでは、授業の開幕まで今しばらくお待ち下さい！」と、映画館にいるような雰囲気を出しつつ講義は始まりました。その映画は、「モダン・タイムス」という映画でした。この映画は 1936 年にアメリカで撮影されたドタバタ喜劇で、主演はかの有名なチャップリン(正式：チャールズ・スペンサー・チャップリン・ジュニア)です。始めに 10 分程度、映画を鑑賞しました。



佐藤先生は映画の鑑賞の後、二つの課題を提示しました。一つは「モダン・タイムス」に見られる経済批判についてです。チャップリンは、当時の経済問題をどのように批判的に描いているかについて考えました。受講生からは「人間が機械のようだ」、「自由がない」、「羊の大群の後に人間の大群の写真を用いて人間の行動を風刺している」などの意見が出されました。この映画は資本主義経済に対する風刺が描かれています。資本主義経済の発達には経営者

者と労働者を生み出し、この両者は分離されているものです。このことを「構想と実行の分離」と言います。そしてこの結果、労働者には過重な労働から逃避する者や病気にかかってしまう者が続出したことを説明しました。

二つ目の課題は、20 世紀後半に先進国に普及した過酷な労働であっても労働者が逃げ出さない「ある方法」について考えるものでした。受講生からは「グループを作って連帯責任をとらせる」などの意見が出されましたが、佐藤先生は「働いた分だけ賃金を上げる」という考えを紹介しました。よりよい働きをするということはその分だけ生産性が高まり、経営者にとってもメリットがあります。このような賃金を「生産性インデックス賃金」といい、このような手法を世界で始めてフォード社が取り入れたことから「フォーディズム経済体制」ということを説明しました。最後に「21 世紀になり、私たちはこのような経済問題を解決できたのでしょうか。詳しく学びたい人は大分大学経済学部で学んでください。」と、受講生にエールを送りました。



講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(98%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(98%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(98%)



という評価ができました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(88%)、「映像はよく見えた」(93%)という結果ができました。受講生の具体的な声として「他校の受講生の考え方を聞くことができ参考になった。」、「映画の中に経済学を理解する観点があることなど、見方が重要だと思った。」、「映画と佐藤先生の説明に引き込まれ興味深い授業であった。」など多くの感想が寄せられました。